

グループ研究【ラディカル・エコロジー】第四章ディープ・エコロジープレジ ュメ

第一週目 笠原・白川・菅井・千葉

第一週目「ディープ・エコロジー」を発表するにあたり、みなさんが読み込みやすいように要約を載せておきます。固有名詞などの語彙は各自調べて理解しておいてください。多くの学問名や学者名が出てきますが、振り回されることなく、話の流れをくみながら読み進めると理解しやすいと思います。

活発な議論を目指して、さまざまなことを聞きたいと思っています。各自で文献を読んでどんな事を感じたのかをまとめておいてください。

ディープ・エコロジー・・・新しいエコロジカルなパラダイム

哲学者 アルネ・ネス “浅いエコロジー運動と、射程の長い深いエコロジー運動” (1972)
⇒人と人以外の自然との関係を根本的に考える

■1970～1980年代

環境汚染と資源の枯渇に関する人間中心的な法的・制度的な対策

■『ディープ・エコロジー』(1985)

ビル・デヴォール、ジョージ・セッションズ、ミカエル・トービアスによって公判

■ディープ・エコロジーの諸原理

- ①人間＝他の生物／自然の中にいる人間
- ②人格と惑星との全面交流
- ③新たな人間学の展開（産業社会の拒否）・・・人手を加えず野生へと本来の姿に戻す
- ④生態系中心的な倫理・・・人間は生態系を傷つけてはならない
- ⑤自然の中に人間が存在しているという意識を促す

西洋の支配的世界観 (DWW)・・・人間>他の生物

人間特例主義パラダイム (HEP)・・・人間≠他の生物

エコロジカルな新しいパラダイム (NEP)・・・人間＝他の生物

■フリチョフ・カブラ 物理学者

- 人を環境から切り離さない
- 相互作用・相互依存・全体のバランスを重視

機会論的自然観への挑戦（批判）

※機会論・・・物質は部分的で外的な力によって動かされる。

■ デヴィッド・ボーム・・・相対論、量子論を提唱

相対論・・・異なるものが相互に作用し合い限定し合う。

同時に外的で互いに切り離されている。

量子論・・・異なるものが切り離されず互いに依存し合う。

■ イリヤ・プリゴジン・・・古典物理学（熱力学）と機会論的科学の矛盾を明らかに

- ①宇宙の全エネルギーは一定で、変化を伴う際は形態を変えるだけ
- ②宇宙は停止する。 →秩序から無秩序へ

- ・ダーウィンの進化論・・・生物システムは進化し停止しない→無秩序から秩序へ
- ・プリゴジン・・・無秩序からより高いレベルの組織の出現の可能性→革命的变化

○科学-プトレマイオスの閉じた宇宙・コスモス

→コペルニクスの無限の宇宙・ユニヴァースへパラダイムシフト
(開放的)

○ 数学-カオス理論・・・小さな効果が大きな効果を引き起こす

ex. エドワード・ローレンツ「蝶の羽ばたきが遠くの竜巻を引き起こした」

○ 生物学-チャールズ・バーチ「電子、原子、細胞と位階を登る際次の諸特性

を全面的に予測することはできない。それぞれの存在は環境と相互
に関係されており、孤立研究は出来ない」

○ 大気科学-ジェームズ・ラブロック

ガイア仮説・・・生命圏は自己調節的システム（諸条件を維持する）

■ ガイア仮説への批判

○1988年 アメリカ地球物理学連盟に参加していた科学者など「ガイア仮説は目的論的で、トートロジー的である」

○ジェイムズ・カーチナー

「自明なものから思弁的なものまで広範囲にわたる仮説の巣窟である」

・ 自明な側面：生物 - 地球科学的過程と生物学的過程とのあいだの十分に証拠づけられたつながりを繰り返し述べている。

・ 思弁的な側面：生物（学）的プロセスが生命に好都合な条件を維持する物理的環境を調節しているという概念が見られる。

■ ディープ・エコロジーの科学的なルーツのまとめ

科学に対する新しいアプローチ ≡ 新しい形而上学に対するディープ・エコロジーの要求

○新しいアプローチ → 機械論と異なった実在の本性についての仮定

- I. 原子論的構成単位ではなく全体性
- II. 部分の再配列ではなくプロセス
- III. 外的な諸関係ではなく内的な関係
- IV. 根本的変化の非線型性
- V. 還元主義ではなく多元主義

■ 東洋哲学

ポスト古典的科学的諸仮定

↑

共鳴

↓

古代アジアのはるか昔の形而上学的信仰

(道教、仏教、禪 - 仏教、ヒンドゥー教 etc)

○ダオ（＝道）

- ・ダオイスト：①全体の中における変化と流れを強調
②対立物を結び付け、反対の相、本質的な緊張、自発性を強調。
(ex) 陰⇔陽の考え方
- ・ダオイズム：弁証法的観念論の一形式。
→二つの対立し合うものの間の矛盾が変化を生む。相反するものがそれぞれを生む。

■ディープ・エコロジーが機械論的世界観に対して挑戦（批判）するための源泉

- ①東洋的知
- ②西洋哲学の伝統の中での反主流の思想
- ③ポスト古典的な諸科学

ディープ・エコロジーに対する批判

■批判Ⅰ：ジョージ・ブラッドフォード

・・・ディープ・エコロジスト達の政治的な批判の欠如を痛罵する。

- ① 生命圏の全ての存在は生存のための権利を有する。

→彼らが批判する人間中心主義と全く同様に、人間の社会的—政治的カテゴリーを自然に対して投影したものだということを認識していない。

- ② 野生と人間中心主義とを峻別するディープ・エコロジストは、人間もまた動物であるという事を認識できない。

→野生とは、人間がいない事だという彼らの考え方自体が、自分か中心的であるという事を認識していない。

- ③ 多くのディープ・エコロジストがマルサス主義的前提を受け入れている。

→人間の数が環境の収容能力を超えてしまった。と考える前に、不適切な開発の

産物であることを認識していない。

■批判Ⅱ：ステファン・エルギンス

・・・ディープ・エコロジーの社会・経済学的そして科学的ナイーブさを批判。

- ① 文化をある価値観の反映として、行動の鍵へと理想化しすぎている。
→科学は社会的な産物である。

■批判Ⅲ：エコフェミニズムからの批判

- ① ネスの論文における総称“man”（人間—男）は性差別主義的欠陥以上のものを持っている。
- ②ディープ・エコロジストの平等主義は表面的。
- ◆平等主義的で、フェミニストの社会的価値観と整合的であるような科学は存在するか？

→再構成的科学（不利な立場におかれている人々の生活の改善、自然の中の多様性を回復させる研究計画が優先されるだろう。）

■結論

- ①最も深いエコロジーはフェミニスト的であり、平等主義的である。
- ②自然を支配される客体ではなく、自由で、自立的な主体として考える。